

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

杉本光衣

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科

【研究題目】

精神医学の当事者参画型研究における認識論

【研究の目的】(400字程度)

これまでの精神医学ではエビデンスのみが重視されて、当事者(=患者)の経験知が軽視されてきた。当事者の経験知の軽視は、研究に当事者が関わってこなかったことに起因する構造的な問題である。近年の精神医学では研究構造の見直しが必要とされており、「当事者参画型の共同研究(user-led research; 以下、共同研究)」が進みつつある。

先行研究の多くは共同研究の実践を中心的課題にしており、理論的研究は十分ではない。なかでも、当事者参画の認識論的議論の不足は、当事者の参画は単なる倫理的な問題に過ぎないという、誤った正当化を導く恐れがある。本研究では、フェミニスト科学哲学を適用することで、当事者参画型の研究についての認識的多様性に関する研究を行う。本研究における認識的多様性とは、一つの研究において多様な立場の認識が存在していることを意味している。これを通じて、共同研究は単なる倫理的な要請ではなく、科学的方法論としても妥当であることを論じる。ただし、フェミニスト科学哲学が適用できない部分では、精神医学の哲学における独自の認識論についても検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、精神医学の当事者参画型研究における認識的多様性に注目し、共同研究が科学的方法論としても妥当であることを論じる。本研究が扱う共同研究の参加者としては、主には、アカデミアに所属する研究者と、アカデミア外の当事者や家族を想定した。以上の目的を達成するため、以下の2つの課題を設定した。

課題① 認識的多様性に関する哲学的枠組みの検討

フェミニスト科学哲学の理論を比較検討し、科学的知識の妥当性や客観性に認識的多様性が貢献する根拠を明らかにする。その上で、精神医学において必要な認識的多様性の理論を創出する。候補となるフェミニスト科学哲学の理論は4つであり(フェミニスト立場理論、状況づけられた知、批判的文脈的経験主義、認識的不正義)、それぞれの理論を検討する。四つの理論はバイアスを取り除くことがより客観的な科学知識を生み出すという点で共通しているが、認識的多様性がどのようにして客観性に貢献するのかという点で異なっている。例えば、「フェミニスト立場理論」は、マイノリティの人々の認識はマジョリティとは異なる視点を持つという点で優越していると主張するのに対して、「批判的文脈的経験主義」は、全ての知識は文脈依存的であり、社会的バイアスのコントロールを行うことが客観性の要件だと主張する。

以上の分析に際して、フェミニスト科学哲学における認識的多様性の理論が、精神医学においては当てはまらないことが予想される。その際には理論を修正する。

課題② 精神医学の共同研究における構造と、認識的多様性の役割

課題①で明らかになった精神医学の認識的多様性に関する理論を用いて、精神医学の共同研究における構造を分析する。精神医学における共同研究の構造のなかでも、当事者-研究者の関係に着目する。共同研究には地

域などに応じてさまざまな形態が存在しており、どの段階で共同研究を行うのか、どの程度の関与が必要なのかは大きく異なっている。

最後に、課題①・②を通じて、精神医学における共同研究が科学的方法として妥当であることを帰結する。カナダのCIHR（Canadian Institutes of Health Research）や、イギリスのNIHR（National Institute for Health and Care Research）など、当事者の参画を積極的に推奨している機関のガイドラインを中心に比較調査を行う。アカデミア主導の研究に当事者がどのように参画しているのかを明らかにする。さらに、アカデミア以外の場で当事者の経験知を比較する方法として、日本の当事者研究についても比較対象とする。

以上の検討を通じて、客観的に思われる科学的知識でさえ社会的状況と深く結びついており、精神医学の共同研究においても認識的多様性が必要であることを帰結する。

【結論・考察】（400字程度）

今回の研究では、認識的多様性が科学的方法に必要な不可欠であることを論証するため、先に理論を確定し調査を行うトップダウン的な構造を採用した。課題1より認識的多様性が科学的知識の改善に貢献することが確認できた。なかでも、状況づけられた知と批判的文脈経験主義という二つの理論は、精神医学の共同研究を説明することが明らかになった。他方で、課題2の調査により精神医学の共同研究における詳細なメカニズムの解明までは追加の検討が必要なことが判明した。精神医学では、明示的であれ暗黙的であれ、当事者は「経験による専門家（Experts by Experience）」として位置付けられている。このとき、経験はある種の専門知識として扱われている。状況づけられた知と批判的文脈経験主義のどちらも、経験をある種の専門知として扱うという現象についての議論は十分ではないため、認識的多様性と科学的知識の関係性について論じるためには、引き続きこの課題を検討する必要がある。